

開発と文学

——テキストに開かれる経験の可能性——

(共催: JASID 人材育成委員会、東京大学東アジア藝文書院)

○汪 牧耘 大山 貴稔 ○松本 悟 ○崎濱 紗奈 ○渡邊 英理
東京大学 九州工業大学 法政大学 東京大学 大阪大学

金景彩 木山 幸輔 キム ソヤン
慶應義塾大学 筑波大学 韓国西江大学

E-mail:oumakiunn@gmail.com

キーワード: 開発、文学、経験、研究、教育

本 RT は、「開発と文学」の関係性を多角的に整理することを通じて、開発をめぐる研究と教育に新しい素材やアプローチを示すことが目的である。

開発は、「より良い生活」をめぐる信仰と実践の総合体と言って良い。こうした開発をめぐる諸経験は、異なる時間や空間のなかでどのように捉えられ、さらに伝えられてきたか。調査報告、研究論文や公文書などといった権威性をもつテキストは、有力な経験の媒体であろう。しかし、それらの媒体は、総じて特定の組織的・学問的規範を通して開発経験を取捨選択し、自らの主張や論点を正当化する性格を持っている。それに依存した経験共有は、ただの断片的な意味伝達になりかねない。

近年、David Lewis とはじめるとする研究者が、文学、映画、音楽などといった文化的表象を開発研究の対象に加える必要性を主張してきた。多様な経験の媒体に光を当てることによって、異なる開発経験の賦活が期待されている。それに関して、日本では、開発と文化的表象の関係性をめぐる研究が散見されるものの、それを比較したり俯瞰したりするものはほとんどなかった。

本 RT は、上述の空白を「文学」を手がかりに埋める試みである。具体的な発表は以下となる。①松本氏の発表は、文学作品を通して開発を学ぶ可能性に焦点を絞る。開発研究者は、どのような文学を読んでおり、いかなる角度でそれらを教育に活かしているのかについて、個人的な経験と工夫を共有する。②崎濱氏の発表では、文学者の開発実践を取り上げる。具体的には、文豪・武者小路実篤が提唱した「新しき村の精神」を土台とした「新しき村」の実践を事例に、文学と農村開発の関係性を再考する。そして③渡邊氏は、「開発文学」という概念を打ち出した先駆的な研究者として、文学作品を「開発」という角度から切り抜くという発想に至った過程とその試行錯誤を分かち合う。

以上の発表を踏まえて、討論者の3人が各自の分野(文学・哲学・地理学)の視点から論点を提示する。参加者を含む全員との議論を通して、「開発と文学」の関係性を考察するための理論・方法の枠組みを探り、今後の課題を具体化する。本 RT は、文学という媒介だからこそより描きやすい人間の豊かな感触・体験と、開発というテーマだからこそより観察しやすい悩み・喜びを対話させることを、多様な人間存在を許容する開発観を再発見し、これからの研究・教育・開発実践に新しい切り口を得ることを望む。